

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Shifting Contours - the Theoretical Views on  
Japanese Literature in Russia/Soviet Union :  
(from the end of X IX century up to Serge  
Yelisséeff)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: エルマコーワ, リュドミーラ, Ermakova, Lyudmila, Е р м а к о в а , Л ю д м ц а メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1624">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1624</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# ロシア／ソ連における日本文学の輪郭

(19世紀末期からエリセーエフまで)

リュドミーラ・エルマコーワ

本論文で主に扱われるのは、優れた日本学者セルゲイ・エリセーエフが1920年にペテルブルグで発表した論文「日本文学」<sup>(1)</sup>である。この論文は、ロシアにおける日本学の新しい時代を開いた研究となつて、ロシアの文学者や読者がそれまで日本と日本文学に対して抱いていた考え方に急進的な変化をもたらしたのである。エリセーエフの論文が出現した時代そのものも、文学、芸術、芝居などの領域において新しい傾向が現れた極めて興味深い時代であった。すなわちロシアの日本文学がようやく専門・特集化されはじめ、それが拠つて立つ学問は結論の“客観性”を重んじ、また研究の対象をなす日本文化との直接的なコンタクトを基層にして行われようとしていた。同じようなプロセスは、当時の東洋学の各分野においても認められるものである。初めて日本文学の専門的な研究を開始し、そしてその研究の哲学的・理論的基礎を築いたのが、サンクト・ペテルブルグ大学に短期間在職中に書かれたエリセーエフのこの論文であったということを論証することが本論文の目的のひとつである。

ここでもう一点、急いで述べておかなければならないことがある。上述のように、エリセーエフの「日本文学」こそが、ロシアにおける日本文学研究にとって決定的な役割を果たした論文になったにもかかわらず、最近までは、

---

(1) S. Yeliseef. Yaponskaya literatura. (「日本文学」)-『Literatura Vostoka』, II号. Vsemirnaya literatura, Petrograd, MCMXX.

学問研究とは無縁のものであるという理由で、ロシアでは入手不可能な論文であり、エリセーエフ自身も、長い間その故郷ロシアでは殆ど知られていない人物であった。革命前のロシアでは有数の金持ちの息子、そして、外国—ベルリンと東京—で教育を受けた人、革命後ペテルブルグでは捕われの身となるが、その後、難を逃れた人であったので、最近までは、エリセーエフの名前も口に出すことが不可能であった。

エリセーエフのパーソナリティーと百篇以上の、数ヶ国語で書かれた論文は、いずれも極めて卓越したものである。エリセーエフの役割を高く評価した1例として、彼の弟子であるライシャワーの言葉を引用しよう。ライシャワーによると、エリセーエフは、世界的な規模で日本学の創立者と言える学者であったと同時に、天才的な語学教師でもあった。また、もっとも重要なのは、日本学において新しいアプローチを発見した斬新な研究者であり、西洋の日本学の歴史において最初の専門的な日本学者であった。<sup>(2)</sup>

エリセーエフの生涯を研究のテーマにし、彼と会ったこともある倉田康夫氏も、エリセーエフを「超能力的な日本学者」あるいは「日本にとって忘れ得ぬ外国人」と呼んでいる。<sup>(3)</sup>

エリセーエフの学者および批評家としての個性は、ある意味でまことにユニークであると言える。そのパーソナリティーの中には異なる教育と意識のパターンが調和的に融合して、そのアカデミックな運命もまた、異なる文学思想と美学の世界において育まれてきたものである。例えば、誇りを持ってみずからを夏目漱石の弟子と自己紹介した彼は、日本にいる間は、歌舞伎の芸術を研究するために、ただ芝居を見たり、本を読んだりしただけではなく、女形の隈取りをつけて、衣装を着せてもらい、一日を過ごしたりした。東京

---

(2) Reischauer E.O. Serge Elisséeff. Harvard Journal of Asiatic Studies. Vol.20, June, 1957, 1 and 2. Studies, presented to Serge Elisséeff.

Harvard-Yenching Institute, 1957. Part 1. Pp.1-35. ついでに述べておきたいが、東洋学者の間で有名で、高い評価を得ているこの雑誌の出版も、エリセーエフのお陰で開始された。

(3) 倉田保男エリセーエフの生涯。日本学の始祖。東京、中公新書、1977。

に在っては、「朝日新聞」のために当時のロシア文学に関するエッセーを書き、パリに在っては、20世紀の日本の美術や中国での考古学的発掘の新しいデータに関する論文を載せたりした。そして、彼の書いた日本語教科書を使って、数世代のアメリカの大学生が日本語を勉強し、育ってきた。また、現代の優れた西欧の日本学者の中にも、エリセーエフの弟子である人は少なくない。

彼自身も素晴らしい先生に習ってきた。上田万年の授業では、「古事記」の講読をし、日本古典文学を彼に教えたのは、羽賀弥一であった。

興味深いことに、日本において最初に掲載されたエリセーエフの論文は、当時のロシアのポエトリーをテーマにしたものであった（「帝国文学」、1909年）。そして、学生時代に彼が勉強した科目のなかには、アイヌ語、書道や漢文が含まれていた。漢文の勉強はすでにベルリン大学時代にとりかかり、ヴィルヘルム・グルーベ教授やオット・フランケ教授の指導のもとに孟子を解釈していた。

日本と中国の古典文学に造詣の深かったエリセーエフは、美術にも関心をもっていた。青年時代、ロシアに住んでいた頃は、絵画に強い憧れを抱き、一時期は画家になる夢をもっていた。そして、ペトログラード大学で短期間非常勤講師として勤めていた間、松尾芭蕉を題材にする博士論文を用意しながら、中国と日本の美術史の講座も持っていた。彼の業績中には大部の著作はないが、その視野の広さと能力の多様性がは疑いのないものである。彼が多少とも関与した分野は、ざっと次のとおりである。日本と中国の古典や現代文学、劇、極東諸国の美術や彫刻、日本の神話、民族学、現代と過去の日本社会、寺社建築、初級・中級・上級の日本語教育等々。ロシアとロシア文学をテーマにした論文は、東京帝国大学の学生時代に日本語で書いたものを除いて、實際上、何も書いていない。また、1956年に現れた英文の「ギリシャ正教と旧ロシアの商人層。個人的な回想」<sup>(4)</sup>は、やや突飛な論文で、例外と考

---

(4) The Orthodox Church and the Russian Merchant Class. Some Personal Recollections. - The Harvard Theological Review, v. XLIX, Number 4, Oct. 1956, pp.185-205.

えられるであろう。

彼が用いた言語について言えば、論文の多くは英語で書かれたが、英語以外にもフランス語や日本語やドイツ語で書いた論文を残している。ロシア語で発表したものは、1957年に作成された彼の業績一覧<sup>(5)</sup>によると、本稿でとりあげられている論文「日本文学」だけである。

しかしながら、この論文のなかで初めて現れた思想と観念こそが、現代のロシアや西欧の日本学の基礎であり、現在では当たり前のようにされている考えかたも、実際にはエリセーエフの理論的前提として最初に現れたものである。エリセーエフの論文が出てから80年経った今、ようやくこの論文を手に入れることができ、そして、我々の日本文学に関する観念が、概ねエリセーエフの論文にまで溯るという事実を意識することが出来るのである。

一方で、エリセーエフのアプローチが公理ではなく、具体的な学者の観念であるということを意識する可能性も生じ、その観念を方法論的・歴史的分析の対象としても検討する時がきたとも言えよう。

さて、エリセーエフの役割を十分に認識するためには、専門的な日本学が出現する以前に日本と日本文学がロシアにおいてどのように理解されていたかということ考察しておかなければいけないだろう。ロシアにおける東洋学の歴史の研究者は、1920年代以前にロシアで出版されたもの全てに対して「間接的」「誤った」「誤解を招く」というようなレッテルをはり、この話題には殆ど触れたがらない。しかし、現在「間違っていた」と思われている概念が当時の常識であったということは、ロシア文化の歴史の一事実として扱うかぎりには、きわめて興味深い事実ではないだろうか。現時点で出版予定の他の論文で、著者は17世紀から19世紀までのロシアにおける日本文学の「前史」を詳細に叙述する予定であるが、ここでは少しだけエリセーエフの論文直前の日本全体や日本文学に対する知識や態度の概略を書いておくことにしよう。

(5) Reischauer, op. cit., p. 29-35.

1900年前後には数多くの日本関係の書物が出版された。それらの中には意外なものも少なくない。例えば、1899年のニバ誌16号では「輝かしい姫」（竹取物語）、1890出版の「浦島漁師」（浦島太郎）、1904年のヘンケル（Henkel）著「日本の神」ではドイツ語からの「古事記」の棟概の翻訳、そして日本語から翻訳された福地源一郎（福地桜痴）の「世界の真実。東京の生活模様」という本で、今読んでも笑えるような明治後半期の外国に対するあこがれやそのファッションを話題にした笑い話である。（神戸市外国語大学教授井上幸和先生の御尽力により、この風刺小説は「浮世見物」であることが判明した。井上教授によれば、その後この小説は福地源一郎選集に収録されていると言う（『櫻痴集』春陽堂、明治四十四年、第二巻、351—434頁）。この場を借りて、この論文の執筆にあたり様々な面でご援助いただいた井上幸和先生に謝意を表する。）

よく知られているように、ロシアの日本文学ブームはとりわけ詩の形式に注目することから始まった。殆どの詩人が何らかの形で日本の詩を自分のものに取り入れたのだが、その知識は詩の文学的な理解を試みた初期の翻訳や描写的なものから得られた。

このようなものは数多く存在し、例えば1898年のポズニャコフの翻訳や彼の1905年の「日本の詩」「百人一首」、そして1913年に出版されたヤマグチ・モイチの「日本詩の主流としての印象主義」や1908年と1914年のG. ラチンスキーの「日本詩」<sup>(7)</sup>等である。

(6) ヤマグチ・モイチの本に関して、もうひとつの研究は、L. Ermakova, *The Japanese Poetry as a Kind of the Russian Literary Myth. (The Cultural Aspect of Translation)*. - *Japanese Slavic and East European Studies*, 1997, 18, p. 83-87.

(7) 当時のロシアの詩における「ヤポニズム」に関しては、K. Azadovski, E. Djakonova. *Bal'mont i Yaponiya.* (『バルモント日本』) モスクワ, 1991. また、日本の古典文学に対して当時の詩集とエッセーは、次ぎの研究に列挙されている。

V. N. Goreglyad. *Rossiya i Yaponiya. Ot znakomstva k izucheniyu.* (『ロシアと日本—紹介から研究へ』) - G. D. Ivanova. *Russkiye v Yaponii XIX-nachala XX v.* モスクワ, 1993.

Tamura Mitsumasa. *Vospriyatiye traditsionnoi yaponskoi poezii v Rossii.* (『ロシアにおける伝統的な日本の詩歌の認識』) - *Mezhliteraturnyye kontakty Vostoka i Zapada. Literary Dal'nego Vostoka i Yugo-Vostochnoi Azii i duhovnaya zhizn' Rossii.* サントクト・ペテルブルグ, 1997, p. 159.

田村充正。ロシアの日本文学。古典篇。「ロシア語ロシア文学研究」, 1993, p. 25.

日本文学をロシアで普及させよう、いわばロシア文化の一部にしようという試みがどれ程盛んであったかは、翻訳書や日本文学を題材にした論文が急激に増加したことから明らかである。その例として、「優美な文学」(Izyashnaya Literatura)誌の1885年号の「日本の叙事詩と叙情詩」,「世界一周」(Vokrug sveta)誌に載ったペトロフの「日本文学」,1899年の「神の世界」(Mir Bozhii)誌にでた同名の論文や1904年に「新外国文学」(Novyi zhurnal inostrannoi literatury)誌にでた「日本の民衆詩」等があげられる。

この時期の日本文学についての論文の中でおそらく最も学問的に評価ができるのは、1904年にウラジオストックで出版されたアストン著「日本文学史」のV.メンドリンによる翻訳であろう。原文はこの領域においては最初であろうと思われる専門的な論文で、翻訳にはメンドリン自身による前書きと彼の師であるスバリヴィン教授の注釈が付けられている。

アストンの複雑な情報を豊富に含んだ著書は一般の読者には読み辛いものであったと思われるが、その中の比較的分かりやすい箇所や所々に出てくる彼自身の意見は、とりわけ頻繁に引用されるようになった。例えば、ポズニャコフの論文にはアストンに倣って、「日本文学は技法的、内容的な面よりも、その長い歴史という点において価値がある<sup>(8)</sup>」という指摘がある。ポズニャコフはかなり詳細に、そして時代構造的にも正確に和歌の歴史の段階を述べ、さらにそれをロシアの詩歌と比較し、ロシア詩において特徴的である音声学的な面から日本の詩歌の美しさを評価しようとしている。例えば、彼はアストンの著書から「高砂」という謡曲を見つけ、それについて次のように書いている。「私はこの劇の翻訳を詩歌的な形に変えようと試みたが、どのようにしても無理であった。実のところこのような躍動感も無く、形式も整っていない劇に、無理やりロシアの音楽的な調べ、美しい韻に満ちた素晴らしい

(8) N. I. Poznyakov. Yaponskaya poeziya. (「日本の詩歌」) モスクワ, 1905, p. 12.

詩歌のスタイルを合わせるといことは、もったいないような気がした<sup>(9)</sup>。  
また、より現代的な日本詩歌に関するポズニャコフの意見も面白い。「現在  
までのところ、日本において素晴らしい詩歌が作られたとは言えないだろう。  
それよりも今重要なのは、日本文学に対して最近与えられた西洋思想の刺激、  
特にイギリスの詩歌に焦点があてられているということである<sup>(10)</sup>」。ヨーロッ  
パの研究論文や翻訳書の熱心な読者であったポズニャコフは、次のような予  
言もする。「思想の深さ、その音節構造と機械的な技法が原因して美しい調  
べをまったく持たない日本の詩歌も、いずれ必ず生まれ変わるであろう。た  
だし、日本のものとしてではなく、ヨーロッパとアメリカの先進国の詩の日  
本語版という形をとって生まれ変わるだろう<sup>(11)</sup>」

アストンの「日本文学史」が出版された同年（1904年）に、かなり長く  
（長さの点でエリセーエフの概論と同じ位）、詳細な、日本文学と演芸につい  
てのヴォストーコフの論文が出版された。この論文は、「日本とそこに住む  
人々<sup>(12)</sup>」という便覧の一部として掲載されたものである。この論文における文  
学についての記述には現在でも通用するような見出しが付けられて、「日本  
文学の特徴」「詩歌」「古代の日本文学（7世紀以前）」（奈良時代や平安時  
代に言及する）「衰退や暗黒の時代」、そして「江戸時代」、「現代の文学やメ  
ディア」といったように区分されている。もちろん、この構造はヴォストー

(9) 同書, p. 42, 44.

(10) 同書, p. 51-52.

(11) このポズニャコフの予言は、事実が正反対になった典型的な例のひとつと考えられるであ  
ろう。もし逆に、ポズニャコフが現在“ヨーロッパ、アメリカの先進国”の言語により作ら  
れた俳句の無数のサイトをインターネットで見たならばどのように思うであろうか。ポズニャ  
コフの考え方は実際的には詩歌の理論の視点からは大変面白いものである。ポズニャコフは  
当時のヨーロッパの哲学と美学の思想に従い詩歌の相互作用に関わる基本的な問題を極めて  
論理的に解釈している。つまり、印欧語の詩歌の特徴である音声学的な調整を、詩歌の内在  
的、普遍的な点として扱い、そして、詩歌において使われている形象はユニバーサルな構造  
をもっている、日本語から英語に、そしてさらに英語からロシア語に翻訳された文章であ  
っても、原文と同じように詩歌的な翻訳の対象となりうる、とポズニャコフは考えていた  
ようであろう。しかし、これは、別の問題であるので、ここでは詳しく述べない。

(12) Yaponiya i yeyo obitateli. («日本と日本人») S kartoyu Yaponii, Man'chzhurii i  
Korei, kartoyu osadkov Yaponii i 46 ris. v tekste i na otdel'nyh tablitsah. 6-oe  
besplatnoye prilozheniye k zhurnalu "Vestnik i biblioteka samoobrazovaniya" na 1904  
g. Санкт-Петербург, 1904.



コフが最も大きい影響をうけたアストンやフロレンツの論文を真似たものであり、さらに遡れば、その当時の日本で出版された文学史の論文から借用されたものである。しかし、ヴォストーコフも単に西欧の論文の丸写しをしたわけではない。彼は数多くの自分自身の評価や考えを述べており、その中には西欧の研究における日本文学の評価に対する厳しい批判も出てくる。彼が指摘するように、日本では「今もっとも文明的な発展を遂げているヨーロッパの人々がまだ野蛮な生活を送っていた頃に、すでに文学が発達していた」。また、彼が日本文学を検討する視点は、現在の日本学者にも納得できるものである。しかし、当時のヴォストーコフにとっては、日本文学がヨーロッパ文学とは異なる性質を持ってよいという考え方も証明する必要があった。

「日本文学はインスピレーション、アイデア、論理、深み、広がりと同様に欠けている」とヴォストーコフはチェンバレンの言葉を引用する。しかしまた、「このような言葉遊びのような点と、奇妙な点、その他のおかしな点も、文学、国の自然、国民性を視野に入れながら考えると、ある程度理解ができ、また独特の魅力も伝わってくる<sup>(13)</sup>」という別な「声」も引用している。今の言い方で言い換えれば、「文化全体のコンテキスト」の中でのものととらえなければならない、ということであろう。しかしながら、ヴォストーコフの論文にも時として次のような発言が顔をのぞかせる。例えば、「日本文学が、たとえどのような西欧の文学に対してであっても、比較の対象になると述べているわけでは決してない」(pp. 266-267)、或いは、18世紀のある俳句について「たいしたことはないが、かわいい」(p. 277)というような、見下す発言もある。読者に伝わる印象として言うならば、西欧以外の文学もその特色は認めなければならないが、決して西欧文学と同レベルのものとして扱えるものではない、ということになる。

N. アズベレフの「日本の心」も同様な立場で書かれたものである。ここでは文学理論とともにさまざまな文学作品の引用や例文が掲載されている。

(13) 同書, p. 268.

アズベレフは、日本文学の優れている面に関しては、尊敬や憧れの念を込めて述べているけれども、権威ある日本文学専門家の意見としてチェンバレンの軽蔑的な意見をも同時に紹介しなくてはならないと感じていたようである。しかし、アズベレフ自身の意見はどちらかといえば、同じくその論文に引用された、日本文化を外からは十分に理解出来ない、閉鎖的なものと見なすアストンの次の言葉に代弁されている。「このような人類のタイプには、私たち西欧人には理解や評価の難しい側面が数多くある……プラトンやヘロドトスは、その世界観が私たちからいかに遠く離れていても、その思想、感性、倫理においては、50年前の日本人よりもはるかに近いと言わなければならない。<sup>(14)</sup>」ここで強調されているのは上下関係よりも、日本文学の神秘性や閉鎖性であろう。言い換えれば、アズベレフにとっての日本文学は、理解しがたいほど遠くて素晴らしい現象であって、その理解しづらさや異国情緒性が、探求心あふれるヨーロッパ人の知能に挑戦しているかのようなのである。このような考えから、解説用としては「日本人の考え方や価値観や感情を紹介し、また国家や社会や家庭の場面を通じて読者に人生の倫理的基盤を紹介している作品」が選ばれている。このように、ここでの文学は、ある異文化社会の倫理的原理を見るために用いる光学装置のような役割を果たすものとされている。

次にとりあげる論文は、1909年にハバロフスクで出版された「現代日本文学史概論」で、その著者はウラジオストック東洋大学出身で、スパルヴィン教授の弟子、G. クシミードフという若い日本学者である。彼はこの卒業論文で最優秀賞までもらっているのだが、実際にはこの論文は「ある日本の大学の文学修士の岩木氏の論文」<sup>(16)</sup>を題材に、修正とコメントを加えながら翻訳

---

(14) Dusha Yaponii. (『日本の魂』) Yaponskiye romany, povesti, rasskazy, ballady i tanki. Pod red. i s predislviem N. P. Azbeleva. サンクト・ペテルブルグ, 1905, p. LXXXVIII.

(15) 同書, p. XII.

(16) 日本の著者とその研究が不明。

したものである。原論文は1868年—1906年の短い期間の文学史を詳細に記述したもので、内容的に評価できる論文と言えるが、翻訳に（あるいは）翻案に近いものであるため、原典分析不足という欠点をもっている。

20世紀の最初の20年間は、ある意味では現在のように日本文学がロシア文化の中に浸透しており、詩人といえれば少なくとも3人に1人は日本にあこがれて「日本風」に何かを書かずにいられない時代であった。しかしその時代の「日本風」の詩だけではなく日本詩歌論の大部分も、東洋学にまったく関係のない人たちの執筆によるものであって、彼らの興味を引き付けたのは、興味深いことに、日本の詩歌の翻訳ではなく、アストンやフロレンツの学術的研究であった。このことは日本文学、とりわけ詩歌の魅力を感じる時代が到来したことを示している。それにも関わらず、日本の詩歌が謎のまま残っており、しかも日本語を身に付けることがほとんど不可能に近いという事情が、20世紀初めの多くの論文に詳細に、そして鮮やかに書かれている。このため、この時代のロマンティックで詩的な人々はそれぞれの「おとぎの国、日本の黄金時代」とか、「日本の春の長寝」というような自分なりの神話的な日本の印象を作り上げ、また、現在でもロシアの詩歌の世界には、そのような、日本詩歌にたいする神話的なイメージを観察することが出来る。

勿論、20世紀初頭の耽美主義者たちも、このような形而上の世界、特殊な規則に従い、ヨーロッパ人の想像を超えた、“治外法権”の詩歌的なゾーンを、高く評価していた。

たとえば、1908年の「オーローラ」(Severnoye siyaniye) 誌にでた G. ラチンスキー著のエッセー<sup>(17)</sup>では、フロレンツ、ラトゲンやガウザー<sup>(18)</sup>といった著者の日本文学に関する論文においてドイツ語に訳された日本文学作品のあるも

---

(17) このエッセーは1914年にモスクワで本として出版された。

(18) Geschichte der Japanische Literatur/ von Karl Florenz. Leipzig: Amelangs Verlag, 1906.

Die Japanische Dichtung/ Otto Hauser. Berlin, Brandussche Verlagsbuchhandlung, [1904?]

のを選んで、ロシア語に訳して、そして、彼の選択もロシア語訳もかなり良いレベルであると言える。ドイツ語から翻訳された作品とは、つまり、紀貫之の「古今集」の序、「日本書紀」のいくつかの歌謡と物語、「万葉集」の和歌、「竹取物語」からの段などである。

面白いことに、日本の詩歌の未来に関して、ラチンスキーの予測はヴォストロコフと正反対のものであった。「将来、ゲーテ、シラー、バイロンやシェリーの詩によって蒔かれた種が日本の詩歌を地面として、どのような芽を生やしても、その芽生えは疑い無く、日本人の魂の彩りと香りをもつであろう。その魂に関しては、日本の歌人の一人の言葉を借りるならば、

何に例えれば良いか  
私たちの国の  
偉大な大和の魂を  
花の香りしかないだろう  
夜明け<sup>(19)</sup>どきの。」

\* \* \*

以上、エリセーエフの論文以前に出版された日本文学に関する論文をいくつか大まかに紹介してきた。上述したように、エリセーエフの論文は空白を埋めるようにして現れたものではない。むしろ、その時まで既に日本文学に関する理論的前提も形成されていたし、常識に近い、一定のイメージもできあがり、そのイメージと偏見が、書物の間をさまよっていた。エリセーエフ自身の言葉を引用すれば、「その隣国に住む私たちは、(日露)戦争以前は日本の国民性や日本人の精神的な宝について無知だったが、1905年のあの厳しい経験をした後の現在になっても、一体何を知っていると言えるだろうか？ いや、以前と同じように無知のまま、西欧の書物からネタを寄せ集めた、間

---

(19) G. Rachinskii, p. 24.

違いだらけの書物だけで十分と言っているだけである。』<sup>(20)</sup>

エリセーエフのこの断定的な言葉がロシアの日本学の新時代を告げたのである。先行研究者を否定したエリセーエフによって宣言された新たな道を、その後の専門研究者はもっぱら前進しなければならなくなった。そして、彼の論文がこの新時代の最初の研究になったと言ってよいであろう。

考えてみれば、その後、このジャンルに新しい研究は現れていない。発生から20世紀はじめに至る日本文学史が、概論の形でまとめられたものとして、エリセーエフの論文は絶後のものと言ってよい。上述のように、エリセーエフ以前には確かにこういった試みはあった。しかし、この論文以降、日本文学史を一人でまとめて書いた論文は、ロシアには一つも現れなかった。例えば、コンラッドにはこの分野の大きい著が多いが、それぞれが一定の文学の時代、流派、あるいは具体的な作品のグループを取り扱う形になっている。また、コンラッドより後になると、このような研究が多少あるにしても、そのすべてが二人以上の著者による共著ばかりである。

エリセーエフ以降で、日本文学史に関連する手堅い研究は、1927年にコンラッドが編集した「日本文学の実例と概案」であるが、これは多数の細切れの撰文集に詳細な注釈が付けられたものである。コンラッドの前書きの冒頭には「ロシアの日本学書ではエリセーエフの「日本文学」という概論がある」と紹介され、エリセーエフの論文が「きわめて優れた」「包括的な」研究であるとしている。コンラッドは、フロレンツの「日本文学史」の存在にも触れているが、「いろいろな資料の寄せ集め」にすぎないと評価しているに過ぎない。

コンラッドの見解では、日本文学史の研究の理論的な基礎と前提は、すでにエリセーエフの「日本文学」によって定義されていた。そして、コンラッドが編纂した教科書風の出版物の目的とジャンルは、主としてエリセーエフが定義した理論的前提を具体的な作品を資料として証明することにあつたと

(20) Yeliseef, 同書, p. 45.

考えられる。コンラッド自身も書いているように、その目的は「具体的な作品の詳しい研究」である。

コンラッドは著書から判断すると、日本文学にたいするエリセーエフの考え方を全面的に認めていた。その後は様々な政治的、歴史的な事情が理由となって、エリセーエフの業績はソ連の日本学者が用いることができない文献の一つとなったが、コンラッドの概説書の基層をなすエリセーエフの思想は、コンラッドの著作を媒介として代々の日本学者の意識の中に入り、学問に対するエリセーエフのスタンスが後世に伝えられていったのである。

さて、日本文学をひとつの一体化した対象としてとらえながら、この分野で最初の専門的な研究を行った、そして、開拓者としての責務を十分に認識していたエリセーエフは、何を最も本質的と考えていたのだろうか。

当然のことであるが、文学史という思想の1ジャンルは、ただ単に文学作品と作家の名前を時間軸で並べて事足りるものではなく、人文科学の一分野である限り、時代が異なれば理解の仕方も異なるのものである。つまり、例えば、文明史の一部門としてとらえられることもあれば、社会回想のダイナミズムのひとつの表現として、あるいは、いわゆる「民族精神」の変貌としてとらえることもあり、または単に、神話や心的現象に起源をもつ、なにがしかの「文学形式」や言葉のテクニクの展開としてとらえられることもある。

エリセーエフの根本的で、哲学的と言ってよい前提のうちで、彼が最も明確に指摘したことは、以下の諸点である。

- ・「世界的」という概念と「西欧の」という概念は同じではないこと
- ・昔も今も外国のものを受け入れながら、それを自分のものに变化させてしまいう日本人の精神の「基盤」というものが存在すること
- ・日本文学の基盤をなしているのは「叙情詩」であること
- ・日本の美学の特徴は、自然に対する特別なスタンスであること
- ・日本文学を理解するためには、一定の知識や常識的なステレオタイプの放棄が必要であること

今考えれば、20世紀のほぼ百年を通じて、これらの定義は当然の常識であった。しかし、ここまで示したように、この考え方が決して以前からの常識であったというわけではない。他にもないエリセーエフの論文によってこの概念が初めて形作られ、一種の声明のように提言されたのである。これらの原理のうち、ある点は、現在でも基礎的とされており、他の点は再考を迫られて、まさに、文化論上のディスカッションのトピックとなっている。しかし、ここではこういった文化論的、哲学的な定理を詳細に分析する余裕は無いので、これらの定理の一側面だけに触れることにしたい。

まず、本論の冒頭で述べた、西欧中心主義に対するエリセーエフの熱心な抗議はこの論文とそれ以前のロシアにおける日本文学研究とのもっとも大きな違いであろう。上記のように、エリセーエフ以前の論文は、日本文学の“脆弱さ”や“浅薄さ”，あるいはそのエキゾチックで、奇異な側面を強調していた。この点において、エリセーエフの論文は、西欧の先駆者たちの研究とは異質のものである。彼らの大多数は（アストンを含めて）、確かに研究対象に愛着をもってはいたが、それでも時として、見下すような物言いになることがある。極めて重要な側面であると思われるのは、エリセーエフが敢えて世界史の中の全ての文化の平等性を唱え、人文科学的研究においては文化の相対性を意識する必要性があることを強調していることである。

20世紀の学問において「好ましいマナー」としての原則のようになったこの考え方を、ロシアの日本学で最初に宣言したのが、エリセーエフのこの論文である。それだけでも彼の名前が我々の記憶に残るには十分であるが、エリセーエフの論文には、他にも多くの意義深い側面がある。

例えば、エリセーエフは、日本のさまざまな宗教的世界観のタイプと日本の詩歌の特色との結び付きを最初に突き止めた。そして、日本の詩歌には何故自然の人格化がないのかということの説明し、60年代や70年代のロシアのインテリの間で憧れの対象になった、自然にたいする日本特有の認識を、最初に解釈したのも、エリセーエフであった。

また、彼は日本人の思考の逆説の例として、日本の有名な金言を紹介している。すなわち、「皆の好みに合った和歌を作るより、特定の人が好む和歌を作るほうが難しい」。このような、日本風の逆説的な考え方の詩的かつ知的な魅力は、エリセーエフの論文よりずっと後になって西欧人によって理解され始め、それは後代の学者たちの努力によるものであったが、それらの学者のディスコースもまた、エリセーエフの論文、あるいは、それを淵源とする意識的、無意識的な引用であると言えよう。

翻訳に対する新たな要求と、それに応える新たな基準を定めたのも、また、「説明的翻訳、注釈など」の必要性を述べたのも、彼である。彼は、注釈とは「東洋の思想の世界を巡って読者を案内する役割」を果たすものであると考え、また、翻訳者とは原文の作品を母国語に“移調”するものであるので、作品の「内容だけでなく、その構造や調べ、一定のリズムと形式で現れるスタイルの特徴を全て伝えなければならない」と考えていた。

「日本人が世界を見る方法は私たちと大きな違いがあり、（ここまではエリセーエフ以前の研究者と同じ発言だが、その続きが異なる）、そして日本人は私たちが通り過ぎてしまうようなことにもよく気づき、彼らにとって彩りも違う風に見える。私たちに何も伝えない、あるいは逆にその異常な形式で驚かすイメージや比喻が、東洋の読者から見ると些細なことに見える場合が<sup>(21)</sup>少なくない」。

この言葉には、異文化に対する全く異なったアプローチや、観察者の新しい視点が語れており、そしてこれが全体にわたるロシアの日本学の主流となったのである。

勿論、エリセーエフがこのような態度を初めて認識したわけではなく、当時の数多くの他の研究者たちも同じように考えていたであろうが、日本学においてそのような原理を最初に、そして見事に提言したのは彼である。彼の

---

(21) Yeliseef, 同書, p. 44.



「日本文学」概論の最後の言葉は彼以降の、ロシアにおける日本文学研究のエピグラフのようにも聞こえるので、これを結びとして引用しておきたい。

「多重多様な内容に富み、そして形式においても優れた日本文学に接することができたお陰で、見知らぬ人の心を隠すベールをそっと巻き上げ、人間の思考のもう一つの面影として現れる美しさを見ることができるようになった。これによって、極東の理解もより深くなり、そして我々自身の心もさらに豊かになるであろう<sup>(22)</sup>」。

---

(22) Yeliseef, 同書, p. 89.